



Title	高坏形器台にみる日韓土器型式変化の連動性
Author(s)	我妻, 佑哉
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 461-470
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105062
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高坏形器台にみる日韓土器型式変化の連動性

我妻 佑哉

はじめに

日本列島（以下「列島」）における須恵器生産は、古墳時代中期に主に韓半島（以下「半島」）加耶地域の影響のもとで開始され、半島の意匠を色濃く留めた初期須恵器段階を経て定型化に至る道筋が示されてきた。一方近年では、古墳時代後期前葉⁽¹⁾（陶邑須恵器編年 MT15 型式期～）における須恵器各器種の大形化や提瓶・短頸壺など新出器種の生産増の背景に、半島南西部の栄山江流域の陶質土器との連動性を指摘する見解が提示されるなど、注目の集まる初期須恵器段階以外にも須恵器生産と陶質土器生産に一定の関連性が見出されつつある。

そこで本稿では、先学で陶器資料の関連性にかんする指摘があり、なおかつ MT15 型式期前後に十数基もの前方後円墳を含む倭系要素を有する古墳⁽²⁾が多く分布する栄山江流域をはじめ、隣接する大加耶・小加耶地域など当該期に列島と何らかの関係性を有していた半島南西部の諸勢力圏を対象に、それらの地域の有力古墳から多くの出土例がある高坏形器台（鉢形器台）の型式学的特徴にかんして列島側の資料との比較を行い、とりわけその大形化・長脚化の様相や意匠の類似性の有無から日韓の土器生産・供献の影響関係を推察する。

1. 研究史と問題の所在

須恵器の大形化とその背景 既往の陶邑編年においては、MT15～TK10 型式期（田辺 1966・1981）にかけて、須恵器蓋坏の口径拡大、高坏・器台など脚付器種の長脚化、甕の頸部伸長などの器形の大形化や、提瓶・短頸壺などの新出器種の生産が拡大することが示されている。以上の要素にかんしては、当該期に普及する畿内型横穴式石室に須恵器が多量に供献されるようになる埋葬施設構造や葬送儀礼の変化と連動した変化として捉えられてきた（藤原 1985 など）。一方、その技術的要因とその背景にかんしては検討の及んでいない側面もあった。

須恵器大形化段階の日韓交渉 以上の点について、近年では、同様の方向性の型式変化および生産・供給器種組成の変化が韓半島南部の栄山江流域における陶質土器にも生じていることが指摘された（中久保 2016・2019 など）。当該地域は、現在に至るまで 14 基もの前方後円墳が相次いで発見されるなど、倭系の古墳・倭系遺物の分布が集中するエリアであり、埋葬施設と

して北部九州系の横穴式石室の採用、葺石や日本列島の埴輪にルーツをもつ円筒形土製品の存在、在地陶質土器に混じって須恵器も供献されるなど、種々の倭系要素が認められ、当該期の日韓交渉の拠点地域であったとみなしうる(福永2007、高田2012など)。また当該期については、隣接する大加耶・小加耶地域にかんしても、前者は馬具や装飾付大刀の意匠や製作技術などの側面から、後者は固城松鶴洞1号墳における須恵器蓋坏・甕などの倭系遺物の供献の側面から、それぞれ列島との対外交渉を行っていたことが確実視されている。

問題の所在と分析の視座 上述の半島内諸地域と列島との間における須恵器・陶質土器生産の影響関係の有無を検証するうえでは、日韓で概ね共通する意匠や使用例をもつ器種間での型式学的比較や特に類似性の高い地域・時期の抽出が必要であると筆者は考えている。

そこで本稿では、型式変化のなかでもとりわけ長大化・大型化の様相が判別しやすいと考えられる脚付器種のうち、日韓双方で共通して生産され、古墳の葬送儀礼に用いられることの多い高坏形器台⁽³⁾を主な検討の対象とする。

当該器種は、日本列島においては初期須恵器段階から生産が継続しているもので、本稿の主な対象時期である6世紀前後には畿内型横穴式石室を有する古墳から出土する例も多い(森本2017)。韓半島でも各地域で独自の意匠・形態をもつ器台が生産されており、例えば栄山江流域でも前方後円墳などの倭系古墳を含む多くの出土例が存在する(国立羅州博物館ほか2021)。本稿では、日本列島・韓半島における器台の型式変化の様相を比較し、他器種の様相も捉えながら、その関連性の有無を検証することで、当該期の日韓交渉が列島須恵器の器形大型化に与えた影響の有無や強弱について検討を行う。

2. 日本列島における須恵器高坏形器台の型式変化

日本列島における器台の大型化・長脚化 韓半島資料の分析に先立って、日本列島における須恵器高坏形器台の型式変化の特徴を明示したい。

まずは畿内周辺地域の生産地資料からみていくと、大阪府陶邑TK23号窯出土の須恵器高坏形器台は坏部高13.2cmの資料と脚部高20.4cmの資料が存在する。後続するMT15～TK10型式期の所産と考えられる陶邑KM113号窯出土例は坏部高14.4cm・脚部高34.0cmを測るなど、全体が大型化しているだけでなく、坏部高：脚部高が1：2以上となっているなど比率の変化＝長脚化が生じているといえる。さらに、陶邑窯とは大阪平野を挟んで北側の千里丘陵に所在し、MT15型式期前後から大規模生産が開始される桜井谷窯跡群(我妻2024bなど)においても、2-16号窯出土例に坏部高11.0cm・脚部残存高32.8cmを測る資料が存在するなど、陶邑窯と同様に他器種の大型化と併せて長脚かつ大型の器台が出現している。

消費地資料についても同様である。共伴資料からみてTK23・47型式期の築造とされる大阪

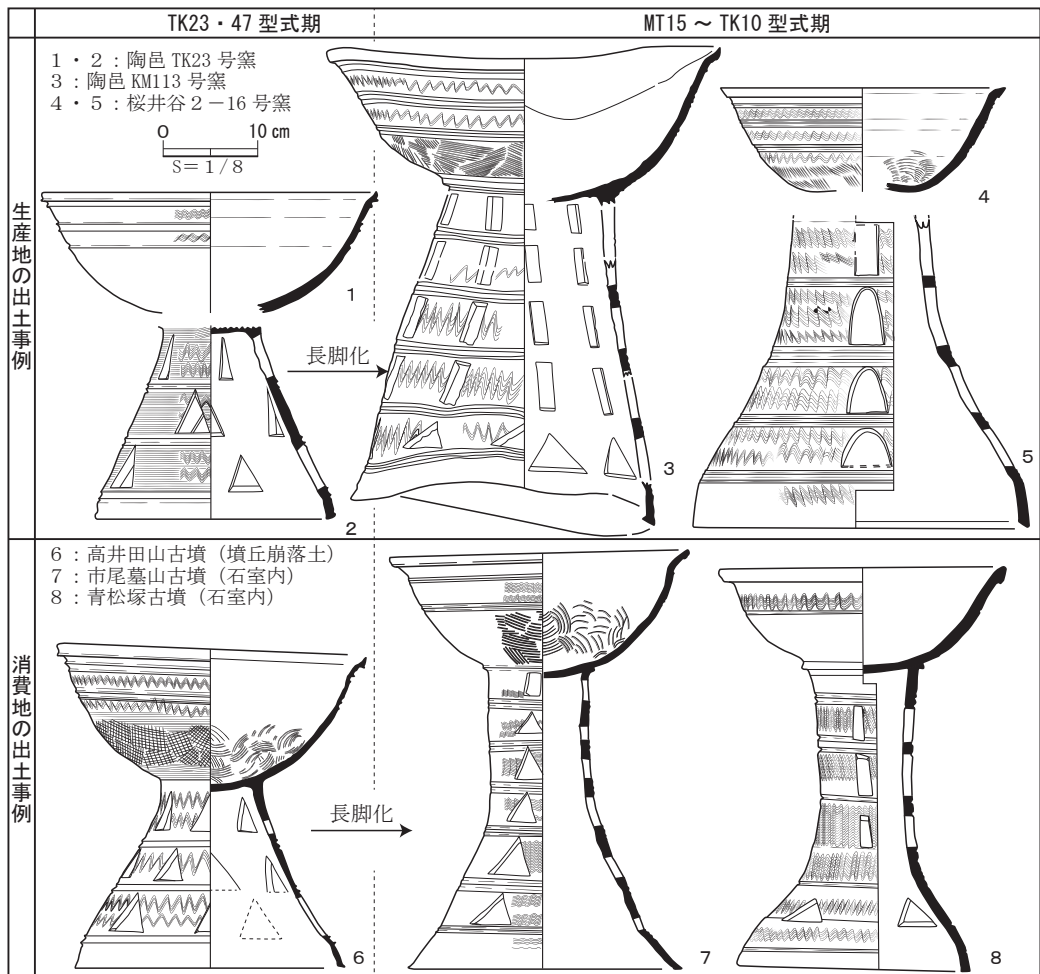


図1 畿内地域における須恵器高坏形器台の長脚化

府高井田山古墳例と比較して、MT15～TK10 型式期の奈良県市尾墓山古墳・大阪府青松塚古墳出土器台は脚部が大きく伸長しつつも坏部が扁平化している様相が窺える。

したがって、日本列島の須恵器高坏形器台においては、陶邑編年 MT15～TK10 型式期にかけて、①坏部が扁平化し脚部が伸長する比率の変化（＝長脚化）と、②全体高の上昇（＝大型化）といった型式変化が併行して生じていたといえる。

ここでさらに、坏部口縁の時期差・地域差に着目すると、TK23・47 型式期の資料や陶邑 KM113 号窯の資料は口縁端部がつまみ上げられるような形状を示す一方で、桜井谷 2-16 号窯の資料の口縁端部は大きく外反しており、製作時に端部を折り返して肥厚させた形状を示す。単に陶工のクセの差異とみることも可能ではあるものの、同様の端部形状がそれ以前にはほとんど認められないことに鑑みれば、先述の坏部の扁平化に伴って新たな口縁部製作技法が出現

したとみることでもある。なお、図1-7・8における口縁端部は外反・折り返しの形状を呈しており、桜井谷系の製品ないしは技術の一定の供給も想定できる（我妻 2024a・b）。

3. 韓半島における陶質土器高坏形器台の型式学的特徴

荣山江流域における陶質土器器台の様相 まずは荣山江流域における陶質土器器台にかんして、その形態的特徴や出土位置の分析を行う。分析の対象とするのは主に当地に所在する前方後円墳や、それらと同時期あるいは前後の時期と推定される古墳・集落などからの出土資料である。列島の須恵器編年による時期的併行関係にかんしては後述する（図2・表1）。

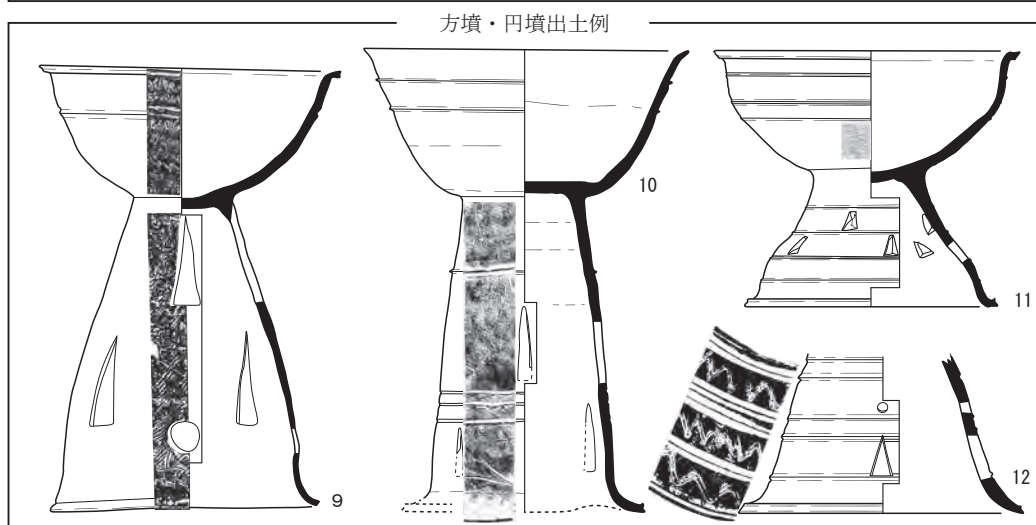
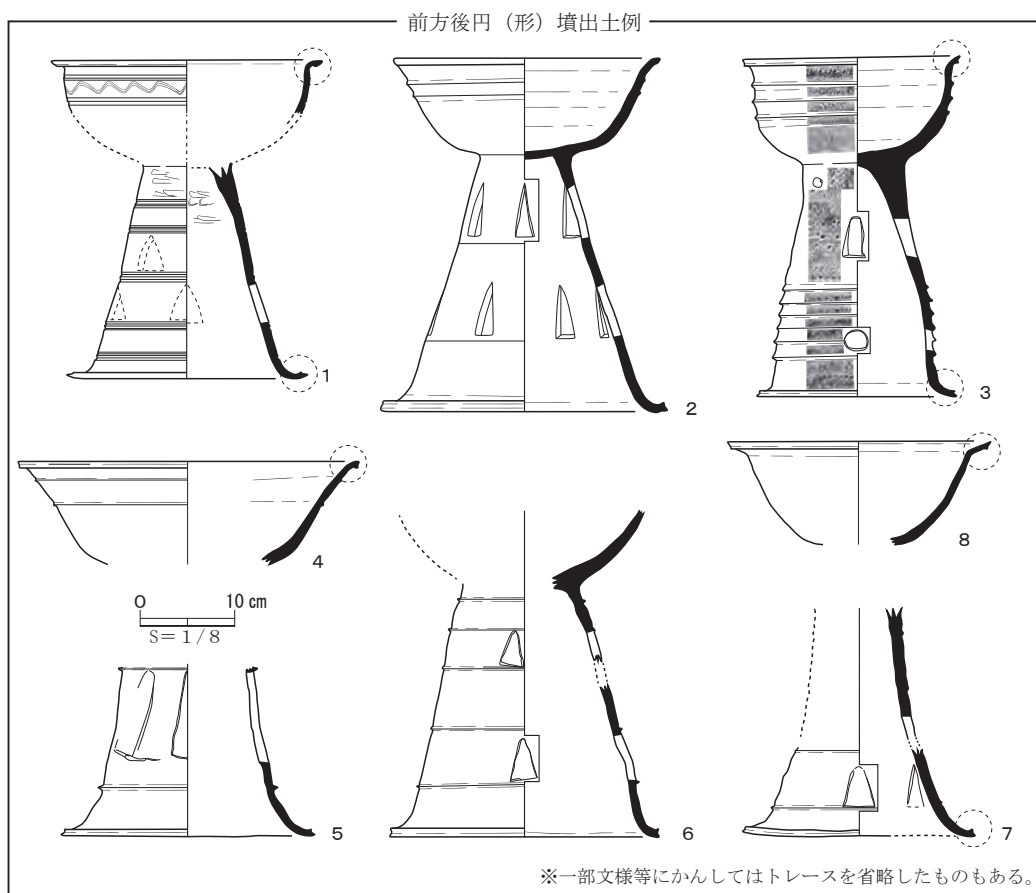
検討の前提として、荣山江流域における陶質土器器台の生産・供給の様相について触れておくと、各地域に中小規模の窯場が遍在するような状況であったため、古墳出土の器台は基本的に所在地域ないしは隣接地域から供給されたものと考えられる。実際に脚部スカシ孔の配置・形状や波状文の様相などは個体間で大きく異なっているのもそのためであり、複数系統的な理解がなされている（羅 2013・李志 2023）。

そのなかでも前方後円墳から出土した例にかんしては、上述の装飾的側面での個体差は認められるものの、脚部・坏部の高さに着目すると、脚部長全体が判明しているものでは25.0～27.0 cmの例が多く、坏部については、10.0～15.8 cmを測り、10.0 cm前後の例が多数を占める。すなわち、坏部高：脚部高がおおよそ1：2以上と、相対的に脚部が大きく坏部が扁平であるといえる。加えて口縁端部形状に目を向けると、図2-1～4・6・7の器台では口縁部が端部付近で外反し、さらに端部を折り返して肥厚させる形状を呈している。このような端部処理は荣山江流域の陶質土器甕などにも普遍的に認められるものである（中久保 2024）。

ただし、それ以外の例をみていくと、羅州地域において方墳から出土した器台（図2-10・11）は大型を呈する点や脚部に対して坏部が低い点は共通するも、前方後円墳などからの出土例とは口縁端部・脚端部ともに異なる特徴を示す。また、光州地域や高敞地域では当該期においても坏部高：脚部高が1：1程度の短脚の器台を生産・供給していたと考えられる（羅 2013）。とはいえ、列島との密な関係性が想定される荣山江流域において、長脚かつ坏部の扁平化した高坏形器台が一定数分布する事実には注目したい。

隣接する加耶地域における器台の特徴 続いて、荣山江流域にも接する大加耶・小加耶地域における併行する時期の高坏形器台の特徴を整理したい。対象とする時期は、朴升圭加耶土器編年のⅧ期～Ⅸ・Ⅹ期（5世紀後葉～6世紀前葉）である。

まず、大加耶系の高坏形器台に関して、王陵と目される高霊池山洞古墳群・陝川玉田古墳群（図3）や有力古墳群である高霊本館洞古墳群・山清生草古墳群などの資料から分析を行った。当該地域の器台は、坏部下半に松葉文が施される脚部径・坏部口径・脚部高がともに大きい一



1 : 高敞七岩里古墳 2 : 潭陽聲月里月田古墳 3 : 海南龍頭里古墳 4 ~ 7 : 光州月桂洞1号墳
8 : 光州月桂洞2号墳 9 : 光州雙庵洞古墳 10 : 羅州徳山里8号墳 11 : 光州河南洞遺跡 12 : 羅州伏岩里3号墳 96 石室

図2 榮山江流域出土陶質土器高坏形器台の諸例

表1 栄山江流域における高坏形器台の諸特徴

図番号	遺跡名	墳形	口端	脚端	文様	出土位置	備考
1	高畝七岩里古墳	前方後円	折	折	波状文(幅広)	石室内	長脚タイプ
×	咸平馬山里1号墳	前方後円	折	折	波状文(やや幅広)	石室内	長脚タイプ
2	潭陽聲月里月田古墳	前方後円	折	折	無文	石室内	長脚タイプ
3	海南龍頭里古墳	前方後円	折	折	波状文(やや幅広)	石室内	長脚タイプ
×	長城鈴泉里古墳	円	?	倭系	波状文(密)	石室内	列島産須恵器?
4~7	光州月桂洞1号墳	前方後円	折	折	無文・波状文(密)	周溝	長脚タイプ多数
8	光州月桂洞2号墳	前方後円	折	×	無文	石室内	坏部のみ
9	光州雙庵洞古墳	円	折	面	波状文(やや幅広)	石室内	長脚タイプ
×	光州東林洞遺跡	集落	折ほか	折ほか	波状文(密・幅広)	溝内	短脚タイプ
×	光州良瓜洞杏林遺跡	方	折	折	無文・波状文(密)	周溝	短脚タイプ
×	光州杏岩洞窯	窯	丸	面	波状文(密)	窯	短脚タイプ
×	和順千德里懷徳3号墳	円	×	面	波状文(やや幅広)	石室内	長脚タイプか
10	羅州徳山里8号墳	方	丸	面	波状文(幅広)	不明	長脚タイプ
11	光州河南洞遺跡	集落	折ほか	折ほか	波状文(密・幅広)	溝内	短脚タイプ
×	羅州新村里9号墳	方	丸	面	無文	墳丘上	5世紀代
12	羅州伏岩里3号墳・96石室	方	×	折	波状文(幅広)	石室内	長脚タイプか
×	羅州新道里遺跡	方か	折	折	波状文(幅広)	周溝	長脚タイプか
×	扶安竹幕洞遺跡	祭祀	折多数	折多数	波状文(密・幅広)	祭祀	短脚タイプ多数

群と、相対的にやや小型の一群とに峻別できる。とりわけ前者の資料にかんしては、Ⅷ期までの器台に対してⅨ期の器台の坏部は扁平化が明瞭である。後者の小型の一群にかんしては、全

体の器高の増加の程度は個体間での差異が大きいため言及しがたいものの、坏部がやや扁平化しているようである。形状は大きく異なるものの、脚部の伸長に対して坏部が扁平化する点は隣接する栄山江流域の様相とも近いと評価できよう。ただし、概して大型ではありながら時期を経るごとに全体の器高としては減じている場合も少なくない点には注意を払いたい。

一方で、小加耶地域の高坏形器台について、林編年Ⅸ期前後に位置づけられている固城松鶴洞古墳群(図4)・内山里古墳群・蓮塘里古墳群の出土資料をみていくと、当該地域に特徴的な器台は全体の器高からすれば栄山江流域や大加耶地域の器台にも劣らない大型の器台であるものの、坏部高が坏部口径に対して大きく、脚部と比較しても坏部高:脚部高がおおよそ1:1程度の資料が多い。併行する時期に坏部が扁平化した例が多い栄山江流域や大加耶地域とは異

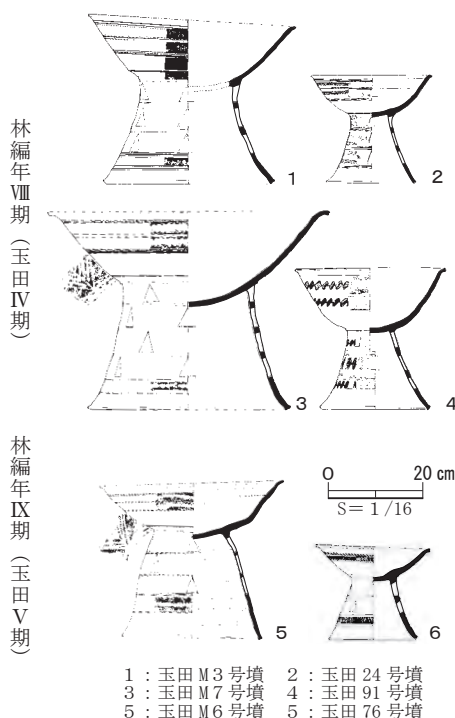


図3 陝川玉田古墳群(大加耶地域)における陶質土器高坏形器台の変遷

なる特徴を有していることが看取できる。

高坏形器台の日韓比較 ここで改めて、韓半島陶質土器器台と共伴する倭系の須恵器（系土器）の編年の位置付けを行いたい。

まず、栄山江流域の前方後円墳である海南龍頭里古墳や小加耶地域の固城松鶴洞1号墳においては、大型の須恵器蓋坏や頸部高 $\geq$ 胴部高に復元しうる長頸の須恵器甕が在地の陶質土器器台に伴って出土している（木下 2006）。これらは日本列島において長脚化・大型化が生じた段階の須恵器器

台と共伴する蓋坏や甕（図5-1～9）に類似しており、これらの古墳が列島須恵器編年のMT15～TK10型式期に築造されたことを示唆するものとして捉えられる。

併せて、MT15型式期以降に日本列島での生産が活発となる須恵器（系）提瓶が光州月桂洞1号墳から出土していることなども踏まえて考えると、本稿で対象とした陶質土器器台の多くが列島須恵器編年で言うMT15～TK10型式期の所産である可能性が高いといえる。その実年代は、武寧王の殯殿との有力説がある公州艇止山遺跡（李漢 2017）においてMT15～TK10型式期の須恵器（図5-16・17）が出土していることに鑑みて、武寧王の没年である520年前後、すなわち6世紀前半代と推測できる⁽⁴⁾。

以上の併行関係の推定を踏まえたうえで、半島西南部の3地域における高坏形器台と列島の資料状況とを比較すると、MT15型式期前後の須恵器高坏形器台で確認しえた、坏部が扁平で長脚の脚部を有する、などの型式学的特徴は栄山江流域や大加耶地域の陶質土器器台でも認められる可能性が高い。この点は、先学で指摘のある須恵器甕—陶質土器有孔広口小壺の頸部の伸長過程の一致など（中久保 2016 など）と類似していると評価できよう。

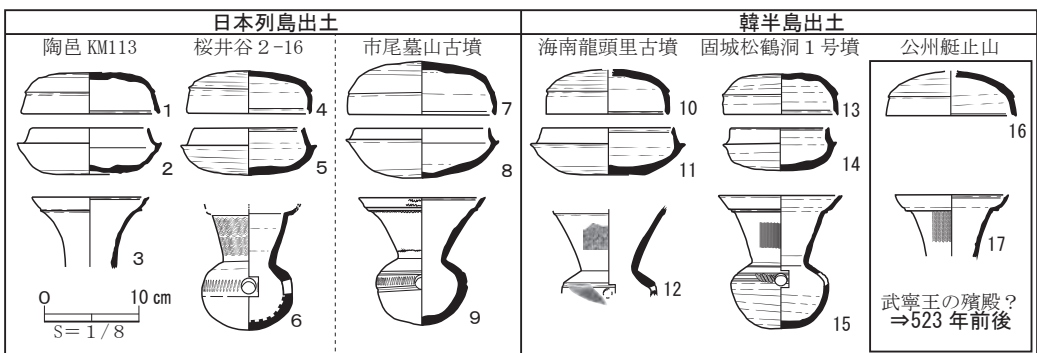


図5 日韓器台大型化の並行関係

より詳細にみていくと、文様の様相やスカシ孔の配置など全体の印象は異なるものの、扁平かつ折り返し技法による口縁端部形状を特徴とする、本稿で桜井谷系とした器台坏部のプロポーシオンは栄山江流域のそれらと類似している。また、KM113号窯出土例にみる脚端部径・脚基部径・坏部が大きく開く形状などは大加耶地域の器台と類似しているとも捉えることができる。加えて、消費地資料であるものの、三重県井田川茶臼山古墳では坏部高：脚部高＝1：1程度の小加耶系に近い器台が出土している（図4－2）。以上のように、今後他器種についても分析を蓄積していく必要があるものの、列島内部の各須恵器生産地と韓半島の諸地域との影響関係が存在していた可能性を見出し得るのである。

4. 土器型式変化の関連性に見る日韓関係

当該期における日韓型式変化の連動性とその意義 前章までに述べたように、実年代でいう6世紀前葉ごろの列島の須恵器高坏形器台にみる全体形状の大型化と坏部の扁平化の2方向の型式変化は、韓半島栄山江流域や大加耶地域の陶質土器器台と類似するものであったと評価する。さらに言えば、列島でそれ以前には墳丘上に樹立されていたとみられる器台が石室内に供献されるようになる点も、上述2地域の供献のあり方と共通していると言える。以上の点について、端部形状など陶工のクセのレベルでの類似性や、研究史で述べたような他の遺構・遺物からみた列島と半島南西部地域との相互の文物および技術の移動の事実を鑑みれば、当該期における日韓間の器台にみる製作・使用法の共通性は、他人の空似ではなく、工人の移動の可能性を含む日韓交渉の一端を反映したものとも考えられよう。

一方で、上述の通り当該期の須恵器器台の生産に半島からの影響を推察した場合、初期須恵器段階の器台のようにスカシ孔の配置や組紐文・コンパス文など、細部の意匠まで併行する時期の陶質土器との共通性を指向しているわけではない点が問題となろう。ただしこの点はむしろ、栄山江流域における埴輪（円筒型土製品）が列島由来のハケメ調整ではなく在地のタタキ調整で整形されている点（廣瀬 2019）と類似しているとも言える。以上のように、手工業生産技術の定着以後は、新たに関係性を深めた地域からの影響がもたらされたとしても、在地の様式に取り入れられる形に留まるのが一般的であったと捉えておきたい。

以上を踏まえたうえで改めて MT15 型式期の須恵器生産の様相を評価すると、それ以前の段階と比較して須恵器の意匠・器種組成にみる陶邑様式ともいえる汎列島的な共通性が失われ、本稿でも言及した陶邑窯と桜井谷窯の差異（我妻 2024a・b）のように、むしろ生産地間で製品の意匠の差異が顕在化する段階であるといえる。こうした地域色発現過程にかんしては、従来は地方での技術の定着に際して畿内地域からの情報によらない独自化が生じた（菱田 1992 など）といった列島内部の要因で解釈する傾向があった。しかしながら、本稿での検討や角坏

などの半島系特殊器種の偏在性に鑑みれば、当該期の各須恵器生産地に半島各地からの影響がいわゆる地域色の発現に繋がっていた可能性も検討すべきではないだろうか。

おわりに

本稿では、MT15 型式期に生じた須恵器高坏形器台の大型化や坏部の扁平化について、韓半島荣山江流域や大加耶地域における陶質土器器台の意匠との関連性を想定した。

このことを踏まえて考えると、陶邑編年に示された MT15 型式（田辺 1966・1981）は、倭の須恵器としての様式を維持しつつも、韓半島荣山江流域などからの技術的影響を受けて大型化をはじめとする変化を果たした新型式であったとも評価する余地が生じる。当該期が須恵器生産技術の波及期であることも踏まえ、韓半島からの影響が具体的にどのような技法痕跡として製品に顕れているのか、主にどの生産地で影響が強く認められるかなどについて、多方面からのアプローチを行っていきたい。

謝 辞

本稿の作成にあたって、福永伸哉先生・高橋照彦先生から懇切丁寧な指導を頂戴した。また、内容の一部は朝鮮古代文化研究会令和 6 年度 4 月例会にて発表し、数々の有益なご指摘を受けた。ご協力を賜った以下の諸機関・諸氏に対して、記して感謝を申し上げる（五十音順・順不同）。

高槻市立今城塚古代歴史館、豊中市教育委員会・豊中市立郷土資料館、龍谷大学付属平安高等学校、国立羅州博物館、諫早直人、岩越陽平、植野浩三、内田真雄、呉 東憚、金田明大、亀田修一、金 宇大、崔 瑛恩、酒井清治、定森秀夫、高田貫太、三好裕太郎、柳澤和男、柳本照男、吉井秀夫。

なお、本稿は、松下幸之助記念志財団研究助成（23－G48）「加耶滅亡前後における日韓関係史の考古学的再検討―須恵器・陶質土器をめぐるヒト・モノ・情報の多角的分析―」の成果を含む。

註

- (1) 筆者は陶邑編年 MT15 型式期以後を古墳時代後期とする立場を採る。
- (2) 韓半島の前方後円墳については、「前方後円形墳」「長鼓墳」とも呼称される。
- (3) 韓国考古学では「鉢形器台」と称される場合が多い。また、以下では単に「器台」とも呼称する。
- (4) 当該期の王陵である今城塚古墳からも大型の高坏形器台が多数出土しており、口縁端部形状はいずれも本稿で桜井谷系とした折り返し状を呈する。

参考文献（紙幅の都合上、個々の報告書の提示は割愛した）

木下 亘 2006「韓半島出土の須恵器及び須恵器系土器に就いて」『須恵器生産の成立と展開』2005 年度（財）大阪府文化財センター・近つ飛鳥博物館共同研究発表会、大阪：pp. 104-154

- 国立羅州博物館・宮崎県立西都原考古博物館 2021『韓・日古代の横穴式石室墓と横穴墓』、羅州
- 高田貫太 2012「栄山江流域における前方後円墳築造の歴史的背景」『内外の交流と時代の潮流』古墳時代の研究7 同成社、東京：pp. 85-102
- 田村美沙 2010「千里窯における古墳時代後期の須恵器生産とその供給」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学友の会、豊中：pp. 557-578
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ、京都
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店、東京
- 中久保辰夫 2016「古墳時代後半期における土器研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』考古学研究会関西例会、大阪：pp. 1-40
- 中久保辰夫 2019「百済・栄山江流域と倭の相互交流とその歴史的役割」『国立歴史民俗博物館研究報告』第217集 国立歴史民俗博物館、佐倉：pp. 115-150
- 中久保辰夫 2024「陶質土器と須恵器」『季刊考古学』第167号 雄山閣、東京：pp. 21-24
- 菱田哲郎 1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会、岡山：pp. 20-32
- 廣瀬 覚 2019「栄山江流域における円筒埴輪の展開過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第217集 国立歴史民俗博物館、佐倉：pp. 215-237
- 福永伸哉 2007「継体王権と韓半島の前方向後円墳—勝福寺古墳築造期の時代背景をめぐって—」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊 大阪大学勝福寺古墳発掘調査団、豊中：pp. 425-434
- 森本 徹 2017「継体大王支援勢力の古墳と儀礼」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報』20 大阪府立近つ飛鳥博物館、河南：pp. 63-76
- 羅 恵林 2013「栄山江 流域 器台 研究 試論」『光州良瓜洞杏林遺跡』大韓文化財研究院、潭陽：pp. 249-261
- 李 漢祥 2017「発掘から解釈まで—艇止山遺跡の事例—」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第18号 山形大学人文社会学部、山形：pp. 25-38
- 李 志映（訳：小池史哲）2023「栄山江流域三国時代土器生産体系の展開様相と地域性」『九州考古学』第98号 九州考古学会、福岡：pp. 87-110
- 林 升圭 2022『加耶土器研究』서경문화사、ソウル
- 我妻佑哉 2024a「大規模群集墳に対する須恵器の供給とその特質—古墳時代後期の近江・美濃地域を対象に—」『待兼山論叢』第57号史学編 大阪大学大学院人文学研究科、豊中：pp. 27-54
- 我妻佑哉 2024b「摂津千里窯跡群における須恵器生産の展開」『古代学研究』第240号 香芝：pp. 3-29